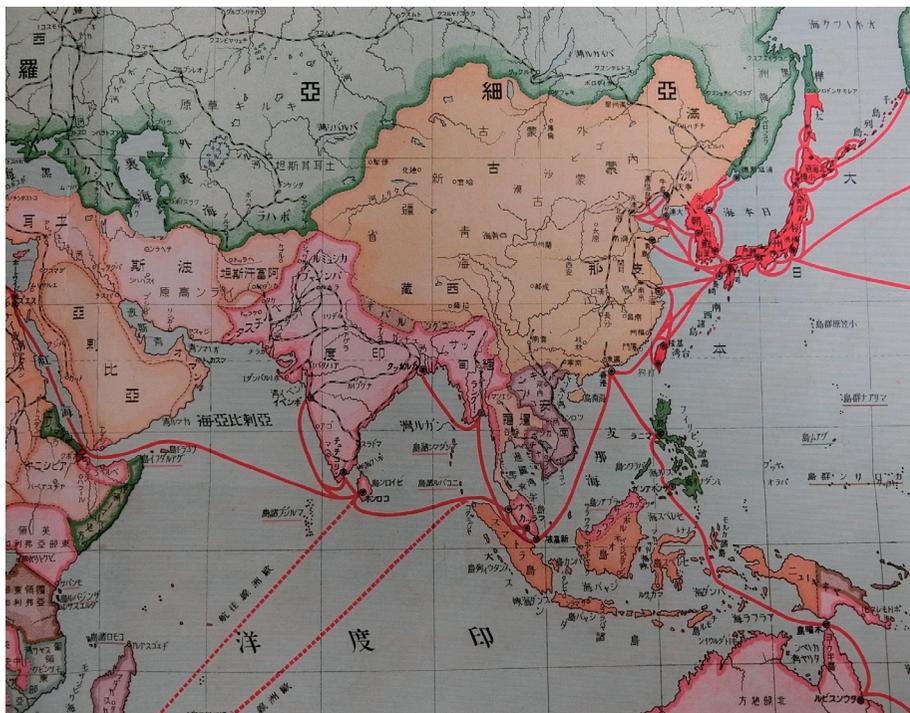


外国航路の開拓



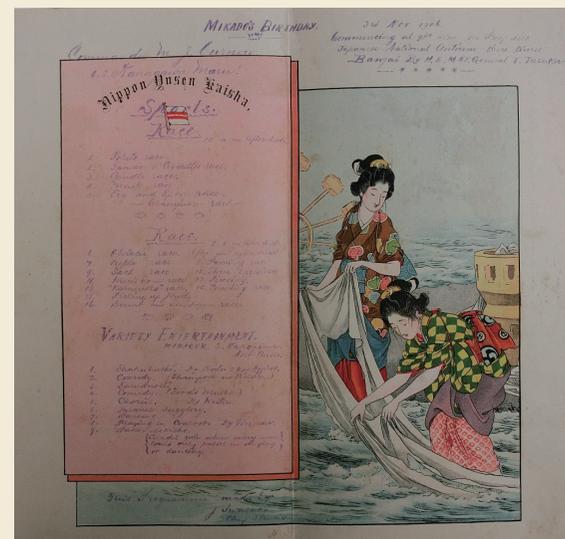
* 佐川家文書（大島町）1304「日本郵船株式会社創立満三十年記念帖」

解説

開国後、政府は自国の海運業の育成につとめ、民間会社を保護して国際競争力を付けさせ、日本沿岸と外航から外国海運資本を排除する方針をとりました。それは「航海自主権の回復」といってもよい重要な国策でした。当初は三菱商会やその後身の郵便汽船三菱会社が保護を受けて成長し、1885（明治18）年に三井系の国策会社である共同運輸会社と合併して日本郵船会社がうまれました。

当時日本では紡績産業のめざましい発展があり、その原料である綿花を良質・廉価なインド綿に求めました。日本郵船は諸外国の船会社の激しい妨害を凌いでボンベイ（ムンバイ）航路を開拓して軌道に乗せ、日本初の遠洋航路が確立されました。

写真は1915（大正4）年当時の日本郵船の外国航路図（部分）で、すでにヨーロッパ航路や北米航路、オーストラリア航路が開かれています。



* 写真上は、日本郵船のヨーロッパ航路に就航していた神奈川丸の船上で、1906（明治39）年11月3日に行われた明治天皇誕生日記念競技・演芸大会のプログラムです。クリスマスディナーのメニュー表等ものこっています（佐川家文書（大島町）1530「船中食事メニュー」）。